九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『ジッド=ブライ往復書簡集』

吉井，亮雄
九州大学文学部

https://doi.org/10.15017/9983

出版情報：Stella. 16, pp.157-162, 1997-07-01. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

『ジッド＝ブライ往復書簡集』

吉　井　亮　雄

ジッドがドイツ・オーストリアとむすんだ関係は，他のどの外国とのそれにもまして深く密接であった。ゲーテやニーチェをはじめとする作家・思想家の著作をつうじて青年期に醸成されたドイツ文化への親近感は，以後も両国の文学者たちとの現実の交流によって補強され，終生ゆらぐことがなかったのである。そういった交流の実際を証言するものとして，これまでにもすでにリルケやクルチウス，クラウス・マンらとの往復書簡集が活字化されているが，多くはジッドの名がドイツ語圏に広く知られたのちのやりとりであった。それにたいし最近公刊されたオーストリア出身の作家・批評家フランツ・ブライ(1871–1942）との往復書簡集では，むしろこれからジッドの主要な作品が翻訳・紹介され，また戯曲『カンドール王』がベルリンやウィーンで上演されようという早い時期に交わされた対話が中心をなす。分量もゆたかであり（若干数の関連書簡をふくめて計 190 通），作家の演劇観や翻訳にたいする考え方，「新フランス評論」創刊前後の文学的な国際交流の実態などについて具体的に教えてくれる貴重な記録といえるだろう[1)]。

書簡の交換は 1904 年にはじまる。当時ミュンヘンで創作・評論活動に従事していたブライが，ベルリン「新劇場」の舞台監督マックス・ラインハルトに代わって『カンドール王』の上演許可をジッドに求めてきたのである。ただし上演の計画それじたいはフランス文学の紹介に熱心だったブライ本人の発案によるものだろう。書簡においても，戯曲の翻訳は自分に委ねてほしいと，単なる代理人の立場をこえる希望が述べられている。この申し出をうけてジッドのほうも積極的に応ずることになるのだが，その要因としてはつぎの 2 点があげられよう。すなわちひとつには外国，とりわけドイツ語圏で自作を受容されたいという願いであり，またひとつには演劇の実践にたいする欲求である。なかでも演劇の実践はジッドの関心を強くひいてやむことがなかったものだ。しか

も演目に指定された『カンドール王』は3年前のパリ初演（リュネ＝ポー演出）では否定的な評価をうけているだけになおさら，作者が新たな上演計画を捲土重来の機会ととらえ意欲を燃やしたであろうことは想像にかたくない。

ブライによる翻訳は翌1905年に出版され，ルドルフ・カスナー訳『ピロクテテス』とともに最初期のドイツ語訳の地位をうるが，ベルリンでの舞台公演が実現するには1908年1月までまたなくてはならない。会場となったのはラインハルトの門下ヴィクトル・バルノウスキーが指揮する「小劇場」である。この公演によせるジッドの期待はことのほか大きく，ベルリン大学のフランス文学担当教授エミール・アグナンに依頼して宣伝活動までおこなったほどだ。しかしながら結果はパリ初演にもまして惨憺たるものとなる。観客の多くは，同じ題材をあつかった自国の劇作家フリードリヒ・ヘッベルにたいする冒涜であると，幕の下りるのもまたず不満・憤慨をあらわにしたのだ。そして彼らの反応があまりにも激しいのに恐れをなしたバルノウスキーはたった1回の公演で興行を打ち切ってしまったのである。この苦い体験の影響は小さくなかった。「公衆」にたいし強い警戒心をいだいたジッドは，以後1931年の『オイディプス』までほぼ四半世紀にわたって劇作から遠ざかることになるのだから……。

以上のようにベルリン初演前後の状況についてはすでに詳細が知られていたが，他方そこにいたる数年間の曲折となると依然として不明確な点が少なくなかった。たとえば従来の通説では1907年まではラインハルトがひきつづき『カンドール王』上演を準備していたとされるが，じつはこれさえも関連資料の年代誤認によって導き出された根拠のない主張なのである[2)]。そういった実証的欠落の多くを解消してくれるメリットだけでも本書簡集公刊の意義は大きいが，まずは新たな情報をもりこみながら1904年以後の経緯をかいつまんで述べておこう。

たしかにラインハルトは当初「新劇場」「小劇場」という2つの劇場の舞台監督をつとめ，1905年の半ばまでは自らが『カンドール王』の演出を手がけようとしていたが，同年8月，かつて所属していた「ドイツ劇場」に復帰・専念すべく「小劇場」の指揮をバルノウスキーに委ね（さらに翌年には「新劇場」からも撤退），そのさいに『カンドール王』の上演権もこの愛弟子に譲ったのである。むろん計画の変更は逐次ジッドに報告されるが，注目すべきはベ

ルリン側との交渉においてかなり大きな裁量権がブライにあたえられていたことだろう。ジッドが彼の手腕を高く評価していたことは，たとえばたまたまその人柄について問い合わせてきたクローデルに，「熱意と献身の情にあふれたひじょうによい人物」と保証したうえで，ブライに仕事をまかせればドイツ語上演の可能性が大いにある，なぜならば「彼は複数の舞台監督ときわめて良好な関係にあるから」(9月25日付クローデル宛書簡）と，演劇界への影響力を強調している点にもはっきりと見てとられる。

『カンドール王』については同じころ，やはりブライが代理をつとめてウィーンの「ドイツ国民劇場」とも契約がむすばれる。そして結果的にはこちらの計画のほうが先行し（演出を担当したのはこれもラインハルト門下のリヒャルト・ヴァレンティン），ドイツ語上演としては最初のものとなったのである。1906年1月，ジッドは初演のためにジャン・シュランベルジェとともに当地におもむいた。観客の反応はけっしてかんばしいものではなかったが，作家自身にとってはまずまず満足のゆく出来だったらしい。それもあって本命たるベルリン公演にかける彼の期待はますます膨らんでいく……。

だが事態はとどこおり，はかばかしい進展を見せない。台本の手直しに時間をとられたこともいくらかは災いしたといえようが，主因はなんといってもバルノウスキー側の怠慢にあった。おおまかな予定時期はジッドにもいく度か伝えられるが，結局はいつのまにか立ち消えになってしまう。その極点をなしたのが1907年1月の事件である。ブライ経由で初演日を知らされたジッドは画家モーリス・ドニとともにはるばるベルリンまでかけつけたものの，なんと会場の「小劇場」には『カンドール王』の看板すらかかっておらず，旅の大義はたちまちにして失われてしまったのである。この不始末にはさすがのジッドも呆れはてたが，にもかかわらず彼が最後まで計画を断念しなかったのには，自身の演劇にたいする執着にくわえて，ブライの説得によるところが大きい。ベルリンで舞台公演をおこなうことの利点をあげつつ，その実現のためにはバルノウスキーとの関係維持が最善の選択と説いたのである。こういった点でもブライは無色の仲介者などではけっしてなく，したたかな戦略を身につけたアドバイザーとしてジッドのドイツ進出に参画していたというべきであろう。

かくのごとく人脈と交渉手腕を高く買われていたブライであるが，いっぽう翻訳家としてはどのように評価されていたのか。もちろんジッドは書簡で不満

をもらすようなことはない。それどころか，たとえば原文では韻文形式の『カンドール王』を散文体にかえる，などといったブライの提案にはすすんで同意をしめし，知人たちにもその技量について「すばらしい翻訳家」と賞賛することさえあった。だが，いざ実際に『カンドール王』の出来ばえということになると「まったく凡庸」で「救いがたい」（アンリ・ゲオン宛），あるいは「文体に締まりがない」（クローデル宛）と，一転してきびしい評価をくだしているのだ。そのさいジッドが比較の対象としてフェリックス・パウル・グレーヴェの名をあげたことはよく知られているが，本書簡集でも『サユール』の版権をめぐる競合で，グレーヴェに仕事をまかせたいが，どうすればブライのプライドを傷つけずにすむかと頭を悩ますジッドの姿をみとめることができる。

とはいえジッドは以後もベルギー人作家アンドレ・リュイテルスの作品を翻訳するように勧めて仲介の労をとったり，あるいは自らもブライの主宰する文学誌「ヒュペリオン」に『バテシバ』をあたえたりと，彼にはたびたび便宜をはかっている。これらはドイツ側との交渉に奔走してくれることへの返礼としてなされたにすぎないのか。おそらくそうではなく，一連のやりとりにはむしろジッド独特の翻訳観の反映を見てとるべきであろう。問題考察の手がかりとしてリルケとの相互翻訳のばあいを想起したい。1910年前後にジッドが『マルテの手記』の断章を，またリルケが『放蕩息子の帰宅』をと，たがいの作品を訳しあったことは文学史的事実として周知だが，それに反して意外に知られていないのは，両作家のあいだには以後もいく度か相互翻訳の話がでたのに，いずれの計画も結局は実現しなかった点である。なぜ不首尾におわったかといえば，ジッドにとっては作品と訳者とのあいだで気質が一致し精神が共鳴しあうこと，なによりもそれが翻訳に必須の条件であり，このきびしい要請のもとでは必然的に幸福な邂逅も稀にならざるをえないからだ。「リルケは『放蕩息子』にはじつに適任でしたが，『抜け穴』にはふさわしくなかったでしょう。逆に彼には『地の糧』を訳してもらえたならばよかったのですが」――これはジッドが後年『法王庁の抜け穴』の訳者に宛てた書簡の一節だが[3]，いうまでもなくその主張はリルケの個別例にとどまらず翻訳全般におよぶ。いわゆる「相性」の具体相について安易に結論をくだすことは厳につつしむべきだが，作品と訳者との関係は微妙かつ可変的とするジッドの信条を思えば，『カンドール王』ドイツ語訳への否定的評価には単なる翻訳の巧拙とは別種の要素も

介在した，少なくともそのように推測することは許されるのではあるまいか。

ところで翻訳という行為は，その性質・機能からいって異文化交流の一形態にほかならない。本書簡集でも記述の多くはジッド作品の翻訳・紹介にかんする情報交換に費やされるが，そこから広くフランス文学全体，あるいはドイツ文学全体へと議論が展開していくばあいもある。その一例としてここでは1908年4月のジッド書簡にふれておきたい。これはフランス文学のアンソロジーを編むにあたって，同時代作家のいずれを収録すべきか，リストを添えて意見を求めてきたブライへの返信だが，ジッドの寸評がじつに興味ぶかい。詩人，小説家，思想家など数項目のうち，ここでは小説家にかんするコメントをいくつか抜粋してみよう——

ジュール・ルナール（ためらうなかれ，誉高くすばらしい作家である）
フィリップ（たしかに採るべし）
アナトール・フランス（欠くべからず）
ラシルド（まったく無用）
レオトー（採るべし）
エレミール・ブールジュは落とすべからず（読まれなくなってはきたが，彼の『神々の黄昏』は傑作である）
ペラダン（ロベール・ド・モンテスキウなどと同じく低級。文学にはあらず）
故人も収録するならばジャリを忘れないこと

個々の取捨が正当か否かはさておき，ジッドが人間関係（彼ら同時代作家とはほとんど全員と面識・交流があった）に影響されることなく，あくまでも作品の質によって判断しているのはまちがいない。そのことはたとえば詩人の項目で，すでにかなり関係の悪化していたジャムについて「とうぜん採るべし」と迷うことなく断言している点にもうかがわれる。また人選は総体的に見て晩年のプレイアッド版『フランス詞華集』のそれとかわるところがなく，ジッドの同時代文学にたいする評価がすでにこの時点で定まっていたことがわかる。

*

書簡の交換は1911年ころからしだいに間遠になり，第一次大戦以後は1933年の文通終結にいたるまでわずか数通しか交わされていない。節度ある礼儀正

しいやりとりに終始し，友情の記録としてはいくぶん物足りなさは残るが，すでに本稿冒頭に記したように，資料体としてのメリットはそれとはべつのところに求められるべきであろう。なお本書簡集は，オリジナルを所有するイギリス人書誌学者ピーター・ホイによって準備されていたが，1993年に彼が急逝したため公刊の可能性があやぶまれていた。それだけにさほど年月をおかずこのたびにいたったのはなおのことよろこばしい。ホイにかわって校訂版を作成したライムント・タイス（現デュースブルク大学教授）はドイツを代表するジッド研究者で，その手堅い実証的学風にはすでに定評がある。本書簡集においてもテクストの校訂は信頼に足るものであり，付注は正確にして過不足なく本文をおぎなう[4]。序文の論述も的確にポイントをおさえて間然するところがない。まずは賞賛すべき業績と呼んでさしつかえあるまい。

註

1）Franz Blei – André Gide, *Briefwechsel (1904–1933)*. Bearbeitet von Raimund Theis. Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft, « Beiträge zur Romanistik », 1997, XXXI–242 pp. テクストはオリジナルのとおりに，ジッド書簡はフランス語，ブライ書簡はドイツ語で活字化されている。校訂者タイスによる序文・付注はすべてドイツ語による。

2）かつて筆者はこの通説にかわる推論を提出したことがある（拙稿「〈新劇場〉か，それとも〈小劇場か〉——ジッド『カンドール王』のベルリン公演延期をめぐって——」，『仏文研究』第25号，京都大学フランス語学フランス文学研究会，1994年9月，137–147頁参照）。確実な実証的資料が公になった今や，拙稿の意義はすでにあらかた失われたといえようが，推論そのものは細部にいたるまでほぼ完全に正当性が立証された。そのことをささやかな悦びとともに記しておきたい。

3）«Correspondance André Gide – Dieter Bassermann», présentée par Claude Foucart, *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 42, avril 1979, p. 33.

4）ただし日付推定にかんして少なくともつぎの修正はなされるべきである——校訂者は「ノイエ・ルントシャウ」誌の編集長オスカー・ビーに宛てられたジッドの書簡（第64番，日付なし）を1907年の1月に配置しているが，この書簡はジッドが『日記』自筆稿の余白に記した「ビーに手紙を書くべし」なるメモ（パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫 γ 1578, f° 71 v°）によって，まちがいなく2月半ばのものであると断定しうる。これにしたがって配置は現状から10番ほど後退することになる。